

特別回
後編

石川真理子の人物探訪

臨済宗円覚寺派管長
横田南嶺 老師

横田南嶺（よこた なんれい）

昭和三十九年和歌山県生まれ。六十二年筑波大学卒業。在学中に出家得度し、卒業と同時に京都建仁寺僧堂で修行。平成三年円覚寺僧堂で修行。十一年円覚寺僧堂師家。二十二年臨済宗円覚寺派管長に就任。著書に『いろはにほへと ある日の法話より 一～三』（インターブックス）、『祈りの延命十句観音経』（春秋社）、『禅の名僧に学ぶ生き方の智恵』（致知出版社）、最新刊に『二度と無い人生だから、今日一日は笑顔でいよう～生きるための禅の心』（PHP研究所）。DVDに『精一杯生きよう』（禅文化研究所）、CDに『三師の説法』『一道を極める』（ともに致知出版社）など。

大本山 円覚寺
鎌倉五山第二位
山号 瑞鹿山
ご本尊 宝冠釈迦如来
開基 北条時宗

弘安五年（一二八二）執権北条時宗が宋より無学祖元禅師を招き開山、元寇で戦死した武士と元軍兵士がともに供養される。開山以来、北条氏をはじめ朝廷や幕府からの帰依を受ける。たびたびの火災や明治時代の廃仏毀釈にも耐え開山以来の宝物が継承され、その多くは国宝および重要文化財に指定されている。明治以降は今北洪川老師により一般の人々にも坐禅の門戸を開き鈴木大拙や夏目漱石なども参禅。現在に到って多くの人々が坐禅に親しんでいる。

●神奈川県鎌倉市山ノ内四〇九
電話 〇四六七（二二）〇四七八
北鎌倉駅下車すぐ

受け継ぐ念い



伝えゆく願い

日本の心と伝統をつなぐために

日本は明治維新、大東亜戦敗戦と、
二度にわたり西洋文明の洗礼を受けましたが、
それを「新しいもの」「進んだもの」として
積極的に受け入れてきた向きがあります。
しかし、受け入れることにより失わざるを得ないものがありました。
今、日本の伝統文化が世界的に注目されていますが、
日本国内においてどれだけ継承されているでしょうか。
実に心許ない現実があるのは否めません。
いかにして「日本」を後世に伝えていくか、
横田管長の談話から探ります。

地域からお寺が消えてゆく

少子高齢化によって社会は激変する。

よく言われることですが、その深刻さはまだ実感を伴っていないように見受けられます。少子高齢化是則ち国家存亡の危機であり、私たちが誇りとしてきた我が国の歴史も伝統も失われかねないということです。歴史伝統生活文化すべて人が守り伝えてきたものであり、肝心の人がいなくなれば継承は難しくなります。

神社仏閣は歴史伝統そのものであり、さらには日本の心までもが投影された存在といえますが、その寺院が今、地方を中心に消滅の危機を迎えているのをご存じでしょうか。『寺院消滅』（鵜飼秀徳 日経BP社）によれば、現在、全国約七万七〇〇〇ある寺院のうち住職のいない無住寺院、つまり空き寺は約二万ヵ寺、宗教活動をしていない不活動寺院は二千ヵ寺以上と推定されるとのこと。実際、地方を歩いてみれば、もはや廃墟と化したお寺を目にすることしばしばです。

「不活動法人とは何とも響きのよくない言葉ですが、この受け止め方そのものに、私は少々問題があるのではないかと考えています。オウム真理教による地下鉄サリン事件をきっかけに私ども宗教法人も収支報告書を提出する義務を負うようになりました。それを提出できない、つまり、法事をはじめとする宗教活動をいっさいしていない寺院は不活動法人とされてしまいます。しかし、活動していないからといって、地域からお寺が消え去っていいのでしょうか。お寺の前を通るのと更地になってしまったところを通るのとでは、気持に大きなちがいがあるはずです。お寺や神社のある風景は私たち日本人の心を和ませ、その精神性に少なからぬ影響を及ぼしているのです」（横田南嶺管長 ※以下「」は横田管長談）



廃仏毀釈に立ち向かった禅僧



寺院消滅の危機は過去にもありました。禅宗に関していえば鎌倉幕府滅亡後、京都のお公家さんたちは後醍醐天皇に鎌倉の寺院および禅宗を滅ぼすべきだと言上します。

「この危機を救ったのは夢窓国師です。後醍醐天皇を懇々とお諫めいたしました。天皇も夢窓国師のお話を聴かれて、なるほどと思われたようです。ところが今ひとつ信じることができない。そこで天皇は当時夢窓国師がいた京都南禅寺を夜、そっと訪れるのです。そこで目にしたのは禅僧が微動だにせず坐禅をする姿でした。後醍醐天皇はいたく感動したんですね。その翌日もまた訪れてみると、今度はお坊さんたちが列を成して食事に行くところで、一糸乱れず歩いていった。天皇は禅宗の尊さを察し、滅ぼすのをやめたのです」

その後の危機といえば、やはり明治の廃仏毀釈。この時は禅宗のみならず、すべての宗派が弾圧を受けました。

「明治政府が国家を統一しようとするため一部の過激な人々の考えによってもたらされたのか、あるいはお寺やお坊さんが本分を忘れてしまい人々からいらないものだと判断されたのか、これだという明確なことはわかりませんが、ともかく廃仏毀釈という事態が起きてしまったのです。鹿児島ではその時すべてのお寺が失われたそうですし、水戸でもかなりひどかったようです。奈良の興福寺なども大打撃で、お坊さんはほとんど還俗しました。神主になったお坊さんもいるのです。しかし禅宗は強かった。気骨のあるお坊さんが少なくなかったんですね。禅の修行というのは師匠から不条理なこと不合理なことを押しつけられ打ちのめされ、耐えがたきに耐えていくものですから、少々のことではぐらつかない。理不尽なことに慣れているんです。廃仏毀釈などは理不尽そのものですが、決然と立ち向かいました。特に円覚寺の今北洪川禅師の兄弟子にあたる荻野独園禅師は禅宗を守るために奔走したといいます。お寺に『神官の格好で神道の作法に従い神社に参れ』と通達がきて、それに従ったお坊さんも少なくありません。しかし荻野独園禅師は『相分かった、仰せの通りにいたしましょう。ただし、世の中は平等ですから、あなたがたも今度お寺に来る時はお寺の作法に従って頭を剃り奥さんと別れてお参りください』とやり返したのです。独園禅師は命まで狙われました。しかし暴漢に襲われかけた時も『命はいつでも持っていますから、いつでもどうぞ』と言ったのです。これぐらい動じない。不合理にめげない、信念を貫いていくのです。やがて廃仏毀釈は下火になって消えていきますが、ひとつには禅宗が抵抗したということもあるのではないかと思います。また山岡鉄舟や鳥尾得庵など禅に理解のある人がいたことも大きいでしょう。それに少し考えても寺院や仏像を破壊してしまって人々の良心が痛まないはずがないのです。廃仏毀釈によって多



お寺は心の拠りどころ

明治の廃仏毀釈が具体的直接的な打撃だとすると、現在の少子高齢化に伴う寺院消滅の危機はひたひたと忍び寄りいつの間にか蝕んでしまうものといえるかもしれません。

「私もまさに今その問題に直面しているところです。日本屈指の豪雪地帯にあるお寺ですが、問題は雪なんです。高齢化で誰も雪下ろしをできない。若者はもういない。この先誰も管理できないから、せめて自分たちの代でご本尊を本山に引き取って貰い、お堂を壊すのを見届けたいと言うのです。去年、どういう状況なのか真冬に見に行きました。管長が来るとなれば地元の皆さんは集まってくれました。

そこで信者さん達が懐かしそうに昔話をするんです。なくなったら寂しいのではないかと思うのですが、もう無理だと皆さん仰る。しかし、はいそうですかというわけにもいきませんから保留にしています。それはやはり風景の中からお寺が失われるのは心の拠り所が失われるのと同じだと思うからです」

たとえ住職がいなくとも、地域の人たちが掃除をしてお寺を管理してきたのは珍しいことではなく、むしろそうしたものでした。だからこそ愛着が湧き信仰心が育ちます。人々の交流の場となり、昨今問題となっている老人の孤独も防ぐことに繋がるのではないでしょうか。

くの宝物が海外に流出してしまいました。ただ、おかげさまで円覚寺はほとんど影響を受けなかったため、ご開山以来の宝物が今に受け継がれています。こうして守られたのは地域性もあるのでしょう」

本質・本分を見失っていないか

このところ音楽やカフェ、セミナーなどさまざまなイベントを開催する寺院がたびたび見受けられます。一方、江戸時代に始まった檀家制度を廃止したという住職もいます。いずれも寺院存亡の危機を乗り切るための試みです。

「どの住職も真剣に、そして真摯に取り組んでいるのでしょう。しかし私としては少し本質からずれているのではないかと思わざるを得ません。お釈迦様の教えというのは真理です。時代がどれほど変わろうとも変わりようがないものです。私たちお坊さんはお釈迦様の弟子として真理を学び、それを実践していく立場です。それさえしっかりしていれば、そんなにうろたえることもないと思うのです」

それだけでは現実に対処できないのではないかと思われるかも知れません。しかしやはり横田管長仰せの通り本質を見失わないことが問題解決の糸口になることは円覚寺を訪れればわかります。ほぼ毎日多くの人が訪れています。休日ともなればその数は更に増えます。坐禅をするために人々が並ぶのももはや珍しい光景ではなく、横田管長による日曜説法の日には約五〇〇名もの聴衆が訪れます。ほとんどが毎月楽しみにやってくる人ばかりで、中には先々代の朝比奈管長の時から来ているという方もいます。

「今の坐禅人気は一時的なものと私は見ています。しかし日曜説法に毎回あれだけの方々がお越しくださるのは実に有難い限りです。先日などは台風のような悪天候で、普通のイベントや講演会なら







三分の一、あるいは二分の一くらいに減ってしまうところだと思うのですが、まったく変わりなく大勢の方がお越しくださいました。これには驚きました。それで私も何か一つでも得ていただくことができるようにと一所懸命お話し申し上げている次第です。今のように一般の方々でも坐禅できるようにしたのは廃仏毀釈のころからで今北洪川老師によります。また、不特定多数の方々に管長が話をするということを始められたのは朝比奈宗源老師です。それが今に到って発展したのではないでしょうか。管長が出て話をするというのは現在でもそう多くみられることではないかもしれません。私たちはお釈迦さまの教えを学び、それを皆様にお伝えしているだけのことですが、このように多くの方々がお越しくださいます。一般の人たちは本質、本物を見極める目を持っているので心しなければなりません」

根を張るには厳しさも必要

残念なことに「お坊さんの堕落」ということがたびたび言われます。しかしその言葉の裏には、本来お坊さんとはお偉いもの、お偉いと思いたい、尊敬に値する存在であって欲しいという願いがあるのではないでしょうか。

「昔は聖職といわれるものがありました。宗教に従事する者や教師、警察官などは聖職だったのです。その聖なるものということを、現代は少し忘れかけているように思われます。そして、そうした風潮の中で根を張るということも失い欠けているのかも知れません。私たちお坊さんの基本は修行にあります。修行が本分であり根本です。しっかり根を張っていれば多少のことでは動揺しないのです。そのためにも修行には厳しさが必要となります。すでに述べたように理不尽なことに耐えてこそです。先日、同年代の住職が訪ねてきました。彼はまだ独身で母親は他界し、老僧である父親は健在ですが介護が必要です。住職の仕事をしながら老僧の世話一切をしており、かなり困難な状況です。私は思わず『大変だね』と言いました。彼は何と言ったかというと、『円覚寺で足立老師にお仕えしていた頃のことを思えば何ということもない』と。私はあらためてなるほどと思いました。これは厳しい修行に耐えてきたからなのです。また、坐禅にきたあるご婦人から、こんな話を聴きました。息子さんが事故で首から下が動かなくなってしまったんですね。ご婦人は全身不随となった息子さんが転んでも、手を貸さず見ている、一人で起き上がるのを待っているというのです。年齢からすれば自分のほうが早く世を去る。残された息子がどう生きていくのか、それを思えば何でも手伝って世話をしてやることが優しさではない。だから見ているのだというのです。これが厳しさです。そして大いなる愛情です。今は厳しくあることが暴力やいじめと受け止められる向きさえあるようですが、どうなのでしょう。一方的な見方であり、また愛情の本質をはき違えているのではないかとも感じます」

これはお坊様がたの修行に限られたことではありません。人間教育の本質であり基本です。相手を思うからこその厳しさです。なぜ修行で理不尽なことを押しつけられるのか。それは人生には理不尽なことも起きるからです。理不尽なこと困難なことを乗り越えた時にはじめて人は生きる喜びを得ていくのです。生きていく力を授けるには優しさだけでは足りない。愛情から発される厳しさも必要なのです。

大切なのは自ら求めること

横田管長は管長に就任してからも僧堂で修行僧と共にご自身も修行僧として暮らしています。大学在学中に得度出家し卒業と同時に僧堂で暮らしはじめ、およそ三十年間に及びます。ほとんど例を見ないことといっていいでしょう。

「私はこれが当たり前と思っていますので苦痛でも何でもないんです。ふだんの暮らしが禅なんです。弟子は、『そんな生活をしている者はいない、老師は特別だ』と言うのですが、他の生活を知りませんし、マンションなどで暮らすことになったらむしろ大変でしょうね。ただしこのように長年修行をしていれば良いのかといえばそういうことでもありません。年数ではないのです。修行というのは自分から強く求めていかなければ身につかない。ですから、たとえ三年でも一年でも深く体験する人もいますし、十年修行してもさほどでもない人もいる。あくまで自分からということが大切です」

臨済宗の修行道場は四十箇所あり、昨今修行僧の減少が問題となるなかで、円覚寺には多くの修行僧が集まるとのことです。横田管長に師事したいと願うからでしょう。指導者として誰よりもまず自ら修行に努める。このような姿勢は経営者や教育者など人を導く立場にある人に必要なものではないでしょうか。いえ、私たち大人は皆次の世を担う若者たちの手本であることを思えば、すべての人に必要な心がけであり態度といえます。

「なぜうちの寺だけ修行僧が増えているのか、本当のところは私はよくわかりません。しかし、学ぶうえでの工夫はしています。仏典だけではなく森信三先生の『修身教授録』（致知出版社）を取り入れたり、歴史なども学びます。鍵山秀三郎先生のような立派な方から学ぶことによって我々お坊さんももっとがんばらねばという気持になる。そうした若者たちの琴線に触れるようなことは取り入れていますね。これは他の道場と異なるところだと思います」





一歩たりとも譲らぬ覚悟

「鍵山先生といえば、つい先ごろある雑誌の対談であらためて敬服するような出来事がありました。対談ですから双方の名前が並ぶ、あるいは縦書きなら上下するわけですが、鍵山先生は断固として私を上座に据えるのです。出版社のほうでは鍵山先生を上座にしました。もちろん私はそれでいいと申し上げましたが、鍵山先生が譲らない。それでは駄目だと訂正を強く求められました。これには驚きました。また、さすがだと思いました。先にも申し上げましたように僧侶というのは聖職です。本来なら、年上でも大企業の代表であろうとも、お坊さんを上座にしなければならないんです。ものごとにはすべて本末があり、順序があります。こうしたことを大事にするのが日本の伝統でしたが、昨今では、ほとんど失われてしまいました。それを、鍵山先生は何としても守ろうとするのです。信念を貫いていく姿勢に胸を打たれました。このような伝統はお寺でも保たれています。たとえばお師家さん（僧堂師家）といって指導者の立場になりますと上座に座らされるようになります。そしてそれまで教えを乞うてきた老僧が下座で頭を下げる。実に恐れ入るわけですが、そのような扱いを受けますと、やはりしっかりしなければという気持になるんです。自覚をもって指導者という立場に相応しい者とならなければと思うものなんですね」

　上下関係があるからこそ意識が育ち、人間的にも成長していく。横並びを平等とするような考え方からは生まれてこないものではないでしょうか。また、歴史も伝統も、なんとなく残っていくものではありません。何をどう受け継いでいくのか、何が日本人の誇りを支えているのかをよく見極め、世の風潮がどうであれ「こうするものだ」と理屈無しに貫かねば継承していくことはできないのです。またそのためには日常生活の中で取り入れ生かしていく必要があるでしょう。横田管長は普段の暮らしが禅であると仰せですが、私たちも日本の伝統、その心や先人の生き方などを日々に落とし込んで実践していかねばなりません。何か特別なものとして、日常から切り離してしまっては、それこそ継承はままならなくなるのです。



失われたものの大きさに気づく

　考えてみれば日本人の生活が急激に変わったのは戦後の焼け野原から高度経済成長期を経たあたりからです。衣食住が変わり、風景も変わりました。日本の伝統衣装である着物はもはや特別なものとなりつつあります。

「ちょうど震災の年にブータンの国王・王妃が来日しましたが、あのときは感激しました。自分の国の伝統衣装に身を包むというのは最高の敬意の表し方です。日本でも公式の場でもっと日本の伝統衣装を着ていただきたいのですが。これだけ世界から日本のものが注目されているのです。皇室でももう少し和服を取り入れていただけないものかと思います。晩餐会などでも今なお明治以来のフランス料理のようですが、和食がこれだけ注目されているのですから、そろそろ日本料理でもてなすようにしてみてはどうかと思います。昨年は戦後七十年ということで戦争にまつわる検証が行われました。私としては明治維新についての検証も行ってみてはどうかと思っています。明治時代は徳川期をすべて否定するような風潮がありました。戦後はご存じのように戦前はすべて悪だといわんばかりです。しかしすべてを否定するというのは、これはおかしいですね。否は否として認め、良い点はあらためて見直してみる必要があるのではないでしょうか。そして、失ったものの大きさに気づくことです。日本には素晴らしい伝統があり誇るべき精神性がありました。やはり良きところは取り戻し、自ら守りながら後世に繋いでいきたいですね」

　横田管長が御祖母様ならびに御母堂より受け継いだ着物を用いて仕立て直した袈裟をお見せくださいました。見事な大島紬です。

「こちらは祖母の遺品、大島は母が嫁入りの時に実家より持たされたものです。母は一度も着る機会がないまま歳をとりました。嫁に来た娘たちは誰も着ないということで、私に回ってきたんです。昔のものは今のものより手がかかっているのでしょう。手仕事の良さが感じられ風合いも素晴らしいのです」

　多少形が変わっても受け継いでいくことの大切さを思います。御母堂はどれほど喜ばれたことでしょう。御祖母様には何よりの供養になりましたでしょう。心は伝わっていくのです。













伝えてゆくべき伝統を守る

「平成二十八年は、我々臨済宗の宗祖である臨済義玄禅師がお亡くなりになって千百五十年となります。五十年ごとに大法要が行われるのですが、今年は三月十日に京都の東福寺で行われ、私は導師を勤めました。それに先だって三月五日から、全国に四十箇所ほどある修行道場から、修行僧たちが合計二百三十名ほど東福寺に集まって大摂心という合同の坐禅修行を行いました。修行僧のことを雲水と呼びますが、一所にこれだけ雲水が集まって修行するのは珍しいことです。私も六日から参加して、雲水と共に朝のお経をあげ、坐禅をし、京都の町を托鉢してきました。私はおよそ三十年ほど前に建仁寺の修行道場にいましたので、久しぶりに京都の町を托鉢して感慨深いものがありました。まだ幸いにも若者達と歩いても負けません。修行中の僧侶ですから若い者達がほとんどです。大学時代までは何不自由なく暮らしてきたと思いますが、頭を剃り、修行僧としての木綿の粗末な法衣を身につけ、素足に草鞋ばきで町を托鉢します。こういう行事に触れますと、伝統の良さを痛感します。どんなに時代が変わり、生活も変化し、人も変わったとしても、我々は変わることのない修行の暮らしを守っています。最終日はあいにくの雨になってしまいました。雨の中を、雲水達は草鞋にカッパを着て、それぞれの道場へ帰っていきます。最終日には終了の儀式を行って、最後に我々各派の管長や修行道場の老師方が、雲水を門のところで見送ります。私ははじめ、こんな雨になって気の毒だなと思いました。しかしながら、雨の中を見送りながら『これもいい』と思いなおしたのです。若い彼らがこれから僧侶として生きてゆくのは、この冷たい雨よりももっと厳しい中を行くのだと思います。仏教離れや寺院消滅などといわれる中を旅立たなければならない彼ら一人一人のことを思うと、これからはもっと大変でしょう。私は、山門を出てゆく雲水一人一人を合掌しながら、ずっとその雨に濡れた草履を見つめていました。そして、『どうか、この冷たい雨の中を、草鞋を履いて歩いたこの日の事を終生忘れないで欲しい。辛い時、苦しい時には、この日のことを思い出して欲しい。大勢の管長さんや、老師方和尚さん達が手を合わせて見送ってくれたこの日の事を忘れないで欲しい』と念じるうちに、涙がにじんできました。我々には伝えてゆくべき伝統があります。それを守っていかねばなりません」

五十年後の日本はどうなっているでしょうか。百年後、どれだけの歴史と伝統が継承されているでしょうか。消えていくものも、失われるものもあるでしょう。一方で守り抜かれるもの、また取り戻されるものもあるかもしれません。それは私たち一人一人のあり方にかかっています。

【取材後記】横田管長より直々にお話しをいただく光栄に預かりましたこと、あらためて深く感謝申し上げます。横田管長は「お坊さんのあり方が問われている」と仰いましたが、私たち参拝者の側も我が事として受け止め、自分に何ができるのか考えていきたいものです。日本の風景から神社仏閣が消えてしまうことを想像するといかにも寒々しい気持になります。子や孫の世代に日本の良き伝統と精神を繋いできたいものです。

※今回の写真は一部石川真理子が撮影



写真◉内田一道
（黄梅院副住職）